

『岩崎純一全集』第五十二卷「科学技術、産業（一の二）」

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第五十二卷「科
学技術、産業（一の二）」

農林水産学および第一次産業（農林水産業）

編纂、監修 岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

『岩崎純一全集』第五十二巻「科学技術、産業（一の二）」

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第五十二巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、農林水産学および第一次産業（農林水産業）に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 〇歳～十九歳

第二編 二十歳～二十九歳

第一部 動物園・植物園・庭園など

第二部 木村秋則

第三編 三十歳～三十九歳

第四編 四十歳～四十九歳

第五編 五十歳～五十九歳

第六編 六十歳～六十九歳

第七編 七十歳以降

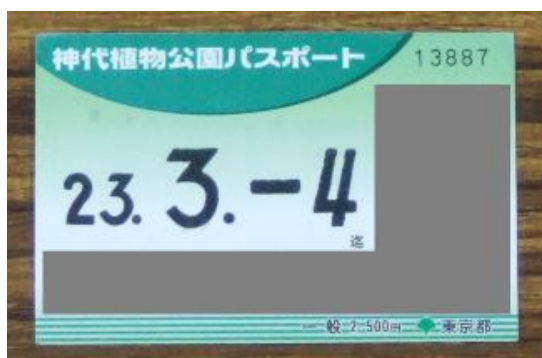
第八編 著作者の一部および著作権者が岩崎純一であるもの

第九編 著作権者が岩崎純一であるもの

第二編 二十歳～二十九歳

第一部 動物園・植物園・庭園など

2011年1月20日 起筆、擱筆、公開



今年は特に計画を立てていないが、昨年と一昨年は、よく一人で都内や関東圏の庭園や植物園に行った。これまた共感覚と関係があると思うが、僕にはどうも、一日中何もせずにボーっとしたり哲学的なことを思索したりする時間が必要のようで、自宅以外だと日本庭園や植物園が居場所としては一番いい。

有名な小石川後楽園、六義園、旧古河庭園から、神代植物公園、殿ヶ谷戸庭園、板橋区立赤塚植物園など、全て一人で巡ったし、水戸の偕楽園から横浜の三溪園まで、一人で昼食と夕食を挟んだ旅の計画を立てて行った。交通費はかかるけれども、入園はせいぜい数百円か無料であり、最高に贅沢な時間の使い方だと自分では思っている。

もちろん、道中も一人、食事も一人、券を買うときも一人。食事の注文時や券の購入時には、むろん言語コミュニケーションは必要だが、敷地内に入ってしまうと正真正銘の「一人」になる。（他の人と一緒に行くのが嫌いなわけではないから、あえて「独り」とは書かない。）

写真は、神代植物公園の年間パスポートで、これだと5回分の料金でその年は何度も行ける。だから、春に共感覚で黄色に見えていた植物の周りの空気が、秋に行ってみたら、やたらと紅色になっていて、「おい、どうした？」と焦ったら、夏の間木が数本移植されていたりする。

一番風変わり面白かったのは、高島平にある熱帯環境植物館で、30メートル四方くらいのドームの中に熱帯地方の植物が色々とそろえてあった。植物に向かって「お前、面白い形してるな」などと一人で勝手に会話して、植物をからかっていた。

動物園や水族園もいいが、こちらは誰かと一緒に行く方が気楽なのである。僕は昔から

動物と共感覚の色などで会話していることがあると自分で感じていて、動物は大好きなのだが、そうであるがゆえに、動物園でライオンかトラが「ガオー」と雄たけびを上げようものなら、次の瞬間、自分も動物に化けて檻に入っていそうで、どうも動物園には精神的に一人で行けないのである。（半分は笑い話で、半分はまじめな話。）

「文字に色が見える」という以前に、動植物が好きな共感覚的感性を持った人なら、この感覚は何となく分かるはず・・・。

ちなみに、僕が最も好きな動物はキリンである。草食であるところは、僕が基本的には肉よりも野菜、洋食よりも和食が好きなところに似ているし、首が長いところは、文字通り僕が色々なことを「首を長くして待つ」ところに似ているし、そうかと思いきや、戦闘態勢に入ったら、相手の動物界での地位にかかわらずライオンなどを一撃で蹴り倒すあたりは、実は肉食好きで、やたらと一本筋が通りすぎていて、あまり幼い頃から哲学や思想などが変わらず、自分の感性の方を優先して生きてきた自分に似ていると思う。

おまけに言うと、キリンは、心臓から何メートルも上にある脳に血液を押し上げるために異常な高血圧であり、これに耐えるため、細身のわりに屈強な血管を持っており、これも少し細身で少し高血圧気味な僕に似ている。これを初めて聞いたとき、「ここまで似ていると、僕がキリンのマネをしているのか、キリンが僕のマネをしているのか、どちらかな」と思った。

第二部 木村秋則

2011年6月20日 起筆、擱筆、公開

■おすすめ著作

『奇跡のリンゴ』

木村秋則という人は、我々共感覚者も、今の日本のアスペルガー症候群に属する人々・発達障害者・自閉症者も、知っておいて損はない人であると思う。

私自身も、幼い頃に木々を見て、「この木は笑っている」、「あの木は寒いと言っている」などと独り言のように話していた。その頃は、果物の木について、どの方角のどの木をどの断面で剪定すれば実がよく生るかが、共感覚ないし本能のような感覚で見えていたから、そう言ったままであったが、今やそこまでの鋭い感覚は失ってしまった。そして、木村氏は、同じことが「おじいさん」になっても出来ている人である。

木村氏の自然観は、ほとんど仏道修行に等しいものがあると思う。仏道修行には、修行そのものの実践と、なぜその修行が必要かを述べることができるロジック力（他人・弟子に教え諭す能力）とが、車の両輪のように必要である。木村氏の場合、もちろん前者に傾

斜している。けれども、それを自分の言葉で述べて本にしている時点で、ロジック力もある人物である。

さて、木村氏に伺ってみたいことは、ちょうど今の私のような、少年期を過ぎた若い世代をどう見ていらっしゃるか、何か痛烈な批判はお持ちではないのだろうか、ということである。少年のような感性を持ったまま、なぜ少年のような感性がなお大切かということ。を理性・知性で語ることのできる碩学の若い世代は極めて少ないように思うのだが、木村氏のように老若男女の誰に対してもほのぼのとした良い笑顔でいられるコツを、ぜひ知りたいものである。